

順調に進んでいた物事が、様々な状況の変化で暗礁に乗り上げることがあります。そのまま終わってもよいのでしょうか。諦めない限り、打つ手は必ずあります。

毎週のモーニングセミナーで輪読する『万人幸福の葉』に「百尺竿頭（ひやくしゃくかんとう）さらに一步を進めて」という諺があります。元々は中国における禅宗の歴史をまとめた『景德傳燈録』という書物の中にある言葉で、辞書には「百尺の竿の先に達しているが、なおその上に一步を進もうとする。すでに努力・工夫を尽くしたうえに、さらに尽力すること」と解説されています。

四十代のAさんは、二十代の頃に国際交流のボランティア団体に所属していました。様々な活動の中で、とりわけ大きなイベントは、夏に行なう「盆踊り大会」でした。海外からの留学生や研修生に日本の文化を体験してもらおうという趣旨で、行政が主導して複数の団体が実行委員として携わり、費用は補助金で賄うというもので、かなり大掛かりなイベントでした。

ところが、世はバブル崩壊後の長く景気が低迷していた頃です。行事に対する予算は、どこも年々減額されていきました。そして四年目の実行委員会を立ち上げた頃、補助金の打ち切りが通達されたのです。

Aさんは、三年目から実行委員長の任にありました。何とかして事業の継続はできないかと交渉しましたが、決定は覆りません。楽しみにしている留学生や研修生の



8月のテーマ | 困ったことから開ける道

まずは、動いてみよう 心を決める

顔を思い浮かべると、やるせない思いになりました。

そのような中で仲間から、三回の開催では皆、精一杯努力してきたじゃないか。四回目はすべてを自分たちで担ってみようよ」と、新しい提案が出されました。

Aさんは、どれくらいのもので出来るかどうかかわらない」という不安はあったものの、仲間の意見に後押しされて実行に踏み切ったのです。すると、補助金があった時には考えもしなかったアイデアが、仲間から次々と出てきました。

毎年、新調していた法被（はっぴ）は、不用になった節句の幟旗や漁船の大漁旗を集め、統一の型紙を作って、実行委員が裁断から縫製までを手仕事で行ないました。青果卸業を営む委員からは「きゅうりでもスイカでも、何でも必要なだけ持っていて」との申し出があり、音響機材は、前年まで協力してくれた業者が、古い機材でよければ無償で貸しますよ」と、サポートしてくれたのです。そして、様々な協力体制がうまく整って、見事に四年目も開催にこぎつけたのです。

今回紹介した体験のように、金銭面による困難な状況が起きた時、打開策は中々見つからないものです。しかし、これが逆にチャンスといえます。

冒頭に記した百尺竿頭は、未経験の領域を体験してこそ実感できるのです。そこに一步踏み出すには、Aさんのように「わからないけれど、やってみる」という覚悟が必要となるに違いありません。